

『小品方』卷十一・本草篇の旧態と その価値

真柳 誠

筆者らは最近、かつて逸書とされていた陳延之著『小品方』全十二巻中、巻一前半の古写本を発見した。そして当古写本の記載より本書の巻十一は本草篇であり、かつ成立年代(四五四〜四七三)も陶弘景による『神農本草経』の校訂(四九二〜五〇〇)より早いことが判明した。つまり陶弘景以前の古本草が『小品方』に記されていたのである。

しかし巻十一の本草篇はすでに散逸して伝わらない。そこで本篇からの引用と確証される逸文を諸文献に求めると、以下の十八条を見出すことができた。ただしaとbは明らかに同文からの引用なので、実質的には十七条である。なおこれらの翻字にあたり、逸文前後の必要な字句は()内に入れ、各々の出典を〔 〕内に示した。また異体

字・筆訛字等は当用漢字ないし現在通用の正字に改め、各文には便宜上句読点を施した。

a (小品方云) 鎮粉。燒朱砂為水銀。其上黑煙名也。〔箋注倭名類聚抄・卷三〕

b (丹砂。一名…) 鎮粉。燒朱砂作水銀。上黑煙名也。

(出小品方)〔本草和名〕

c 金牙。一名黃石牙。(出小品方)〔同右〕

d (署預…) 一名土茶根。一名茅茶根。(已上二名。出小品方)〔同右〕

e (牛膝…) 一名牛脣。(出小品方)〔同右〕

f (丹參…) 一名逐馬。出陶景注。又小品方云) 人病腰痛。服之則。能起走逐馬。故以名之。〔同右〕

g (酸漿…) 一名苦薺子。(出小品方)〔同右〕

h (薺危…) 一名鹿隱忍。(根名也。出小品方)〔同右〕

i (水萍…) 水中大馬萍。一名馬菜。一名馬葉。(已上。出小品方)〔同右〕

j (蝦蟇…) 一名去甫。一名苦蟻。一名仇道。(出小品方)〔同右〕

k (蓬藁…) 一名大莓。(出小品方)〔同右〕

(同右)

l 礪石。一名磨刀石。(出小品方)〔同右〕

m (天名精。…小品方名) 天蕪菁。一名天蔓菁。〔証類本草・卷七所載新修本草図経文〕

n (陟釐。…小品方云) 水中鼈苔也。〔同右・卷九所載新修本草注文〕

o (王孫。…小品述本草) 牡蒙。一名王孫。〔同右〕

p (葶汁。…味甘寒無毒。主馬毒瘡。擣汁洗之并服之。葶采也。(出小品方)〔スタイン四五三四新修本草・卷十八新附藥条〕

q (麥門冬。…小品方) 垣衣為使。〔医心方・卷二〕

r 牽牛子。木香丸用之。牽牛子尤瀉人腎。又害於元精。識者知也。〔福田方・卷十一〕

以上の逸文および当古写本の記載などを参考に、本草篇の旧態を収載葉の傾向と薬数、および記述内容と形式の四方面から考察してみた。その結果、下記の結論と示唆が得られた。

(一) 本草篇への収載が推知された薬物は計六九種である。その傾向より所載薬の多くは『神農本草経』薬であり、それ以外の多くも『名医別録』薬と考えられ

る。

(二) 当篇の収載薬数は二〇〇〜三〇〇程度と推定される。そして(一)の傾向より、その大多数は以後の『神農本草経集注』に収載された薬物と重複すると考えられる。

(三) 当篇には『神農本草経集注』と同様、気味・毒性・主治・七情などの薬性、時には別名とその説明、また副作用の注意や使用法も記されていたと考えられる。

(四) 当篇の記述形式は旧『神農本草経』と同様、正名の直後に別名が記述されている。したがって全体は、およそ正名―別名―気味・毒性―主治の順に記されていたと考えられる。

(五) 当篇を含めた『小品方』の記載は、旧『神農本草経』や『神農本草経集注』の復元精度を高めるための資料的価値が大きい。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)